HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	わが国におけるフランス語圏心理学の導入とその受容について：教育臨床研究への影響とその問題点
Author(s)	間宮, 正幸
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 96, 1-23
Issue Date	2005-06
DOI	10.14943/b.edu.96.1
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28954
Type	bulletin (article)
File Information	96_P1-23.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究科
紀 要 第 96 号 2005 年 6 月

わが国におけるフランス語圏心理学の導入とその受容について

── 教育臨床研究への影響とその問題点 ──

間 宮 正 幸*

The Introduction and the Acceptance Process of 'Psychologie Française' into Japan: Discussion from the Point of the Influence to the Practice in Clinical Psychology and the Research on Human Development and Education

Masayuki MAMIYA

【要旨】歴史の転換期に直面するわが国の教育学・心理学の課題の検討，とりわけ今日の教育臨床にかかわる検討においては，実践を支える教育の思想の歴史をふまえなくてはならない。本論では，かかる観点から，従来格別の議論がなかったフランス語圏心理学の導入と受容の過程とその問題点を，戦後 1960 年代までを中心に論じた。フランス語圏心理学は，ヨーロッパ哲学・思想と医学の臨床研究から成り立つ病理的心理学を特徴としたが，戦後 1947 年に，心理学が哲学・医学から独立して変容を遂げた。しかし，最近，その流れに対する批判も出ている。本論では，戦前，戦後におけるこうした動向・変遷を辿りつつ，わが国の心理学者，医学者，教育学者の研究過程を検討した。その独自の歴史と内容は，未だ十分に研究されておらず，教育臨床に関する議論，あるいは社会変動下における自己の形成という重要な問題の検討において，今後も研究の継続・発展が期待される。
【キーワード】病理的心理学の導入と受容，城戸幡太郎の教育科学と教育臨床，Wallon の発達・教育の思想，戦後の教育学とフランス語圏心理学，社会変動と自己の形成

はじめに

われわれが歴史の転換期に直面しているという現実は，心理学の研究と実践においても例外を認めない。日本における教育心理学の成立と展開に関する研究への期待があるとするならば，かかる意味においてであろう。そのように考えた場合，現時点においては，いかなるかたちにせよ臨床領域にふれないで済ますことはできないのであるが，その際，臨床心理学・心理臨床学の今日の隆盛をそのまま紹介するというのではなく，わが国における関係領域の研究と実践の形成過程，すなわち，戦前の心理学導入期から戦後に至るまでの歴史的検討を踏まえたうえで吟味することが必要である。とりわけ，子ども・青年，家族，学校などを扱う教育臨床領域

* 北海道大学大学院教育学研究科教育臨床講座助教授（教育臨床心理学・臨床教育学研究グループ）

においてはかかる観点が一層重要になる。

戦後日本の心理学の研究と実践の一区切りを国際心理学会が東京で開催された1972年前後とした場合，その後の臨床領域の発展は質量ともに著しいものがあることは周知の事実である。教育臨床領域に限ってみても，その蓄積は以前に比して遥かなるものがある。一方で，こうした発展の背景には，教育に関する諸問題の噴出，あるいは子ども・青年の成長・発達にかかわる新しい困難の発生・増長という現実があるのであって，その現実を直視すればただちに歴史・社会のなかでの検討が必要になることが理解されるであろう。

しかし，過去の研究と実践が顧みられる機会は思いのほか乏しく，今日の状況がどのように形成され，また，どのような問題が内在しているのか遍く知られているわけではない。本論で試みるのは，わが国の研究と実践に一定の影響を及ぼしたものの，従来格別の議論がなされなかったフランス語圏心理学――psychologie française を本論ではこのように表現する[1]――における臨床領域の研究に関する検討である。すなわち，今日の教育臨床につらなる研究と実践のなかで，先人の努力にもかかわらず，結果的に広く修得されるにいたっていないままのフランス語圏心理学が果たそうとした役割は何か，今日の心理学・教育学の領域になおも示唆し寄与するところがあるとすればそれは何か。これを，戦前から戦後1960年代に至るまでの導入と受容の経過を中心に整理し，検討を加えることである。

Ⅰ．フランス語圏心理学の研究状況

1．わが国における状況

以下に概括する戦前－戦後のフランス語圏心理学の導入と受容の過程を論述する前に，検討対象となるフランス語圏心理学研究の現況とわが国の研究状況，とくに臨床領域に簡単にふれる。そのことが本研究の第一の目的に大きくかかわるからである。

国際心理学会（1972年）の東京開催を目前にした『講座心理学』（東京大学出版）の刊行は，1970年代以後のわが国の心理学研究を方向づける記念碑的なことであった。

その第1巻『歴史と動向』の「各国における研究の状況」のなかに，坂元昴（1971）のフランス紹介がある。これは，フランス語圏心理学の全領域にわたって資料を参照している点からも今日の時点でみて類するものがない的確なものであったと言ってよいだろう。坂元は，フランス心理学の大きな特徴として，病理学的傾向，発達心理学的傾向，哲学的傾向の三つをあげ，その系譜を辿るなかで，源泉としての哲学的背景と精神病理学の影響にふれている。そして，実験心理学，病理心理学（psychologie pathologique），理論心理学，発達心理学，社会心理学についてそれぞれ簡潔に紹介している。

最後の部分で，坂元は，「フランス心理学は，神経生理学，精神病理学，哲学の影響の下に，フランス中心主義の傾向をもって，独自の理論的展開を見せてきた。とくに，Ribot，Janet，Binet 以後の Piéron，Dumas，Wallon らの功績は大きい。現在では，この人たちの弟子である Fraisse，Oléron，Lagache，Zazzo らの時代に移っている。今日では，さらに，若手研究者が活躍をはじめ，アメリカ心理学との差も少なくなってきている。社会心理，精神分析への関心も増大し，伝統的に嫌われていた臨床心理学という用語も使われるようになった。心理学の哲

[1] スイス，ベルギー，アフリカ北部などフランス語で研究が行なわれている地域を含む。

学的傾向も，Merleau-Pontyの死後薄れ，あらゆる心理学の研究分野が，実験心理学的手法を用いるようになり，世界に開かれた状況を呈するようになった。しかし，やはり依然として，アメリカ心理学に見られるような，人間を分析的に，要素の集合として見る傾向に対して，フランス心理学は，人間を一つの全体的人格としてとらえ，人間の行動をその文脈の下で研究し，解釈しようという傾向を残しているといえよう」とまとめたのである。あわせて，論文の末尾で，「心理学専門家の養成制度」にふれ，フランスの心理学関係資格制度とその形成過程を紹介して，わが国とフランスにおける心理学研究の状況と養成課程の違いをあきらかにしている。

本論ではわが国の教育臨床にかかわる領域を中心に論じようとしているが，1971年は，わが国の臨床心理学の歴史概観を行なった場合，いわゆる「混乱期」にあたる（村瀬，1985）。医学部における精神医療の領域からはじまった「大学紛争」は，臨床心理学研究にも大きな影響を与えたのである。その後，しばらくのあいだ「模索期――事例研究運動の時代――」が続いた。事例尊重の態度と治せる専門家の養成が求められたのである。そして，1980年代になると本格的な心理療法の実践と研究が求められるという新段階を迎えることになる。このようななかで，日本の臨床心理学研究者の志向が，伝統のフランスの病理的心理学，あるいは新興の臨床心理学（psychologie clinique）に向かうという大きな流れには至らなかった。1970年代に，フランスの精神医学を代表するEy. H.の主要著作の翻訳ほかいくつかの動きがあったが，それらは精神医学者によっている。これには語学上の問題にとどまらないいくつもの背景があり，それを分析することは本稿の主題にかかわっている。

筆者は，1990年代に至って社会からの要請が大きくなった教育臨床心理学の構築を期して，わが国のフランス語圏心理学の研究動向を概観したことがある。精神医学，心理学，教育学などの流れにおいて，京都を中心とする関西での地道な研究と実践は注目されるものであった（間宮，2000）。なかでも，雑誌『発達』（ミネルヴァ書房刊）における浜田，谷村，山口らのフランス語圏心理学の翻訳・紹介が貴重である。創刊号（1980年）で，雑誌創刊の主旨を伝えることにもなるWallon（1946）の重要論文「〈自我〉意識のなかで〈他者〉はどういう役割を果たしているか」を翻訳・紹介したのをはじめ，PiagetやWallonらフランス語圏心理学にかかわる高い学問的実践的議論を展開してきた。これらは，Wallonの翻訳集『ワロン／身体・自我・社会』（浜田訳編，1983），『子どもの生活世界のはじまり』（浜田・山口，1984），『ピアジェとワロン』（浜田，1994）などにまとめられており，わが国の教育臨床研究にも影響を与えている。

一方，教育臨床領域につらなるという点においては，心理学的研究だけでなく，むしろ，東京大学教育学部・勝田守一以後，戦後のわが国の教育を教師・父母と共に考えようとする教育学者たちが，フランス語圏心理学から教育思想や教育実践方法を汲み取る努力を行なっていたということに着目すべきであろう。フランス語圏心理学にはそのような傾向と包容力があることをあらためて認識しておく必要がある。この流れは，後に，堀尾（1991）の発達教育学，坂元（2000）の情動と感情の教育学，田中（2003）の臨床教育学などのかたちで示されることになる。

しかし，教育臨床の課題に挑戦する本格的なフランス語圏心理学研究は，坂元（1988）をもって嚆矢とするであろう。深刻化するわが国の子ども・青年の問題にかかわる真剣な議論と結びつつ，かの地の理論家の中心たるWallonの発達・教育の思想を歴史のなかに位置づけて読み解くことがはじめられたのである。Wallonが児童精神医学者にして教育学者であること，彼の理論の中心的思想である発達（évolution）の深い意味，とりわけ身体，情動，自我・社会の発達

について，これらがしだいにあきらかにされてきつつある。坂元の研究は，Wallonが，世界史上の政治的・社会的・文化的な危機と，世界に生きる子どもの自我・自己の形成における危機の双方を掴むという方法を示した稀有な例であることをあきらかにするものである。

2．現代フランス語圏心理学の変容

先述の坂元昴（1971）のフランスの研究状況紹介は，実質1960年代までであるが，この時すでに「若手研究者が活躍をはじめ，アメリカ心理学との差も少なくなってきている」と指摘されていた。日本の一研究者によって紹介されたこのようなフランス語圏心理学の研究事情は，ソルボンヌ大学の職業指導研究・差異心理学研究を担っていたReuchlin, M.（1957）による小歴史概説書においてさえ「フランス心理学は病理的心理学を第一の特徴とする」と言及されるように，源泉ともいうべき病理的心理学，あるいは臨床心理学領域にもすでに波及していたのである。

現代フランス語圏心理学の状況は，Nicolas(2002)が最近まとめた*Histoire de la psychologie française*（『フランス語圏心理学の歴史』）で詳しく跡を辿ることができる。これにはフランス語圏心理学の研究内容が歴史に沿って縷縷論述され，現在の研究状況と展望が描かれている。著者は記憶研究などの実験心理学を専門とする立場ながら，MesmerやPinelにはじまる精神医療の曙時代から，Ribot，Janet，Binet，Piéron，Dumas，Wallonを経て，現代のLagache，Lacan，Anzieuにいたるまでの病理的心理学，臨床心理学の研究も詳細に紹介して位置づけている。ちなみに，ここに掲げたAndieuを除く多くの臨床家たちは，同じように高等師範学校（École normale supérieure）で学び，哲学教授資格を取得し，その後に医学を修業した人々である。

学問の歴史的な流れのなかで，フランスの現代の「臨床心理学」の状況を検討する際，この過程でもっとも重要なことは，1947年，Lagacheが，Guillaumeのあとをうけてソルボンヌ大学の一般心理学の教授となり，心理学としての養成研究系単位（L'Unité de la Psychologie）を設けたということであろう。そして，もうひとつの重要なできごとは，Wallonが1951年にコレージュ・ド・フランスを退職したことである。さらに，現実的に重要なことは，1954年に学校心理士が教師として配置されたこと，1985年に法律で制度化された心理士（psychologue diplômé d'État）の資格が誕生したことであろう（大場，2000）。これらがさまざまに絡まりあって変容を遂げている。

Lagacheは，フランスの臨床家ながら精神分析をいち早く実践した人で，精神分析に関するフランス語の多くの著作があるが，英訳版の論文集（Lagache，1993）があり，欧米でも彼の考えは受容され参照されている。この英訳本には，ソルボンヌ大学で彼の学生であった精神分析家（元ストラスブール大学・ナンテール大学）Anzieuが序文を寄せ，フランスの臨床心理学の状況を記している。Anzieuは，「ラガシュは，哲学と医学から独立させることでフランスの心理学の発展に貢献した」と献辞しており，この評価がLagacheの存在位置を物語る。ソルボンヌの元同僚Bresson（1992）もまた，16人の自伝集のなかで「ラガシュは哲学者ではなく，心理学者となる学生を養成するために，いろいろなことを学ぶと同時に教えなければならないと考えた」と回顧している。同様にAnzieu（1992）自身も，そのなかで哲学から精神分析に転向したこと，哲学や医学の研究に対する心理学の自立，および心理学研究の中へと臨床心理学の統合を要求して戦ったこと，自分はほどほどにフランス語圏心理学を代表してきたことなどを

語っている。

これらの自伝的語りをみると，フランスにおける科学的心理学研究あるいは臨床心理学の形成過程は統一されたまとまりのあるものではなく，まさにふたつの世界大戦の影響とイデオロギー対立も加わって混沌としていたことが伺える。

そのなかで，特筆すべきは，Lagache や Anzieu の研究と実践活動に見るように，哲学と医学からの「臨床心理学の独立」が，いきおい精神分析の強い影響下に入ってしまったということであろう。Lagache の立場は，「真の心理学は臨床学でしかありえないこと，また真の心理学は人間の主観性と間主観性を中心にしてこれら様々な方法を総合的に用いなければならないと指摘」(Chemama, 1993) というような立場にあった。フランスのみならず，ある程度は世界の臨床心理学の雰囲気を表現していると見なせる。しかし，Ribot 以前から営々と築かれてきた病理的心理学に基礎をおくフランス語圏心理学は，病理は自然がなせる実験と考え，子どもも大人も同時に対象にしようとする総合的な人間の科学をめざすという大きな特徴を備えていた。Wallon に至る精神発生学 (psychogenèse) は，ヨーロッパの長い哲学・思想と臨床的研究の蓄積のうえにたって，障害をもつ場合や戦争の被害・悲劇を直視しながら，人間の自由・平等の権利や子どもの発達の権利をとらえようとしていたのである。すなわち，子どもの成長と発達の権利を保障する思想や方法を構築しようとしていたのである(堀尾，1998)。それは，自我の発達，自己の形成を中心におきながら，客観的実在，あるいは環境の重視につながっており，心理学の問題を主観性と間主観性にとどめておくものではなかった。

しかし，戦後の新しい臨床心理学は，大きな流れとしてみる限り，Wallon や Zazzo が編集することになる雑誌 *Enfance* で展開されるような新しい発達研究の理念をもつ流れとも，それ以前の病理的心理学とも袂を分つことになったと見てよかろう。

こうして Anzieu(1923-1999)の世代になると，哲学を学んだのち専門の医学教育を受けることはなくなり，「心理学研究」のなかで臨床心理の実践と研究を行なうことになる。Wallon の講義を聴き，師の Lagache から長きにわたって学び，Lacan に導かれ，ほどほどにフランスを代表すると自覚していた Anzieu の研究は，その意味で戦後のフランスの臨床心理学の発展ないし変容を示す代表的存在かもしれない。著作の邦訳もあり，国際的に通用する内容でありつつ，それでも独自的なのである。しかし，全体的に見て，今ではフランスの戦後の臨床心理学は，他国と比べてそれほど独自的な傾向はなくなったと言ってもよいのではなかろうか。

3．フランスにおける臨床心理学研究・教育の「危機」

しかし，このようなフランス語圏心理学の臨床研究の動向に対して，21 世紀に至って意見を述べる人が出てきている。1935 年生まれで，哲学を学んだのちに臨床に入ったパリ北大学名誉教授（臨床心理学・認識論）の Jalley (2004) がそのひとりで，『フランスの大学における心理学研究・教育の危機』と題する 2 巻全 1044 頁に及ぶ大著を著している。フランスでは「心理学の危機」はたびたび指摘されてきたことで，特段驚くような題ではないが，ここで論じられていることは本論の主題にかかわっており，扱われていることの意味は決して小さくない。

Jalley は，1945 年から 1968 年までに焦点をあてて，Lagache 以後のフランスの臨床心理学的研究について批判的検討を加えるのである。現在では，臨床心理士 (psychologue clinicien) 資格を取得するために学習・研究の多くを精神分析学またはその近辺の領域研究に費やすことになっているが，この本ではフランス語圏心理学の起源と，それを決定したものについて，ま

た1990年以降のフランス語圏心理学の学問的状況について根本的に論じようとするのである。Jalleyは，Wallon（1938）が編集した大部の『精神生活』を再編・刊行（1982年）してその構想の紹介に務めた人で，『フロイト・ワロン・ラカン ── 鏡の前の子ども ──』（Jalley, 1998）などの著作に見られるように，Freud, Wallon, Lacan, Bion, Winnicottらのすぐれた内外の臨床心理学理論を互いに生かそうという立場にたっている。にもかかわらず，見方によっては，本書は，フランス語圏心理学の見識高い人による，伝統がすでに失せてしまった状況に対するルサンチマンの書になっている。

彼は，PiéronらがLagacheをソルボンヌ大学教授候補者に選んだのは過ちであったとさえ述べ，大学の心理学研究における研究・教育が，実験心理学と今のような臨床心理学主流でよいのだろうかと問いかけるのである。1970年代に，PiagetとWallonの発達心理学研究の議論を整理した論考で評価をうけたJalleyが，臨床心理学を専攻する身にあって，真に哲学する'psychologie française'の面目を伝えておくということであろうか。この大部作の最終章には，現況を示して「ブティックでものを売る道化役者」という題名がつけられている。

それぞれの歴史的事情があってのことだが，Jalleyの言わんとすることは，どのような人間性の研究を行ない，また心理学者の養成を行なうかということにかかわる問題として，わが国の状況とも無関係ではなく，また看過できることではなかろう。

以上，足早に現代のフランス語圏心理学のなかでの臨床にかかわる領域の変容過程を見た。以下には，戦前－戦後期（国際心理学会開催の頃まで）において，わが国ではフランス語圏心理学をどのように導入しかつ受容してきたかを検討し，その経過と影響および教育臨床領域にける問題点を検討する。

II．戦前のフランス語圏心理学の研究

1．臨床心理学史におけるフランス語圏心理学

本論冒頭で述べたように，広くわが国における教育心理学の成立と展開を吟味しようとするならば，今日では問題の連続と断絶の所在を，臨床の領域含めて吟味するのでなくてはならないであろう。その場合，戦後の臨床心理学の導入・発展過程のみならず，戦前から戦後にわたって系統的に明らかにすることが課題となっている。

最近の臨床心理学の発展に伴って，わが国でも学説史研究がなされつつある（間宮，1998. 下山，2001）。これまでも，鈴木（1962），村上（1968），本明ら（1971），村瀬（1985）らによってまとめられている。研究過程の概観は，主に戦後を歴史的に区分するかたちでなされているものであるが，それらによると，戦前のわが国における臨床心理学関係領域の戦前の遺産として，「教育病理学・治療教育学」の実践と研究，「性能検査法」の導入と開発，あるいは「変態心理学」の研究などが知られている。主としてドイツ語圏・英語圏の諸研究の紹介と一定の応用研究がなされていたことが伺える。

そして，戦後は主にアメリカ臨床心理学，ユング心理学の導入などに力が注がれたとされている。たとえば，戸川（1978）は，「臨床心理学は，一方では精神医学から，もう一方では社会事業からスタートした」と位置付け，戦前「第1期」の知能検査をはじめとする心理検査を主とした時期に続いて，第2次大戦中の昭和18年頃からいろいろな形で臨床の仕事が変ってしまったこと，その間ほとんどアメリカの文献が日本に入ってこなかったこと，戦後はカウンセ

リングが臨床の本流のようになってしまったこと，などを当事者として回顧している。これらが歴史的経過の概略であるとみなされている。

しかしながらその際，教育臨床領域に関する検討を望む立場から，そして，実際に一定の影響の形跡が見られたということを知る立場から，精神発生学や病理的心理学の独自の伝統と蓄積をもつフランス語圏心理学の受容と定着過程を省くことはできない。また，その検討は独自の意味をもつことになるのである。

そこで，本論でまず試みるのは，わが国の戦前－戦後復興期に，フランス語圏心理学導入の先駆的役割を果たした心理学者の研究の検討を行ない，次に，精神医学者の研究について検討することである。

2.1.　心理学者の留学と研究の導入

2.1.1.　心理学者野上俊夫のフランス留学

戦前におけるフランス心理学導入の立役者のひとりは，京都帝国大学文学部野上俊夫(1882-1963) であろう。野上俊夫先生記念録編纂世話人会 (1965)，大泉 (2003) 等を参照しながら野上の経歴，研究歴を以下に簡単に記す。

第一高等学校を経て，1906 (明治 39) 年，東京帝国大学文科大学哲学科心理学専修を卒業した後，京都帝国大学大学院入学。松本亦太郎教授のもとで事実上の助手となっている。この頃，同医科大学で解剖学，生理学を聴講し，実習にも参加している。1911 (明治 44) 年，京都帝国大学文科大学助教授に就任。1912 (大正元) 年，「アルフレッド・ビネーに就いて」と題した講演を行ない，また，雑誌『芸文』第 3 巻第 8 号に「アルフレッド・ビネー」を掲載している。1913 年には「スタンレー・ホール氏の教育説」，「スタンレー・ホールに就いて」の講演を行なっている。これらから，留学以前からの野上の研究志向が伺われる。

その後，1913 (大正 2) 年，ドイツ・ライプチッヒ大学の Wundt のもとに留学したが，翌 1914 (大正 3) 年第 1 次欧州大戦 (第 1 次世界大戦) を逃れてイギリスに渡り，諸大学を訪問。1915 年にパリに移っている。スイス，イタリアなどを訪れた後，1916 (大正 5) 年パリに戻り，ソルボンヌ大学，コレージュ・ド・フランスに出入りし，Janet の講義を聴講。また死去直前の Ribot とも会談している。Ribot の多くの著作を読んだ後，アメリカに渡りクラーク大学で Hall の指導を受けて 1916 年 8 月に帰国した。なお，1926 (昭和元) 年にも再び渡仏し，哲学者 Bergson を尋ねている。

帰国の翌 1917 年，「リボー先生の思いで」，「リボー先生の訃を聞きて」，「感情の心理(リボーの学説)」を著している。その年の野上による京都帝国大学文科大学心理学演習では，Ribot, T. 1910. *Problême de psychologie affective.* (『感情心理学の問題』) がとりあげられている。それ以後，心理学演習では，Binet, Dumas, ドイツの Meumann, アメリカの Hall, James, Thorndike などが読まれていたが，1929 (昭和 4) 年から Wundt と Hall が中心的位置を占めるようになる。Le Bon, Fouillée らのフランス語圏文献は「心理学特殊講義」や「課外講読」で教授されていた。

2.1.2.　野上俊夫の研究の特色

野上の留学先は，ライプチッヒ大学であった。ところが，すぐさま第 1 次世界大戦に遭遇したこともあって，ヨーロッパ各地とアメリカを巡回するようなかたちになった。そのような大

きな経験が，その後の野上にどのような影響を与えたのか知る由もないが，渡欧以前から関心を抱いていたフランス語圏心理学の影響はあきらかである。コレージュ・ド・フランスを中心に，パリで学んだ影響が伺える。渡仏以前から Binet に関心を示し，こうして実際，大正 5 年に Janet の講義を聴き，フランスの病理的心理学の独立に寄与した Ribot と会談した日本の心理学者が存在したのである。しかも，それを引き継いだ Dumas の考えにも強い関心をもって帰国後に演習を行なっている。また，1925 年に発刊された Wallon の文学博士論文 *L'enfant turbulent*（『騒がしい落ち着きのない子ども』）を，1927（昭和 2）年に京都帝国大学図書館に入れたのも野上であった。二度目の渡仏の翌年のことである。

このように，フランス語圏心理学の本質的特徴である病理的心理学にいち早く接した野上であったわけである。しかし，現在京都大学附属図書館に残されている『青年心理講話』(1919 年)，『児童の情操とその教育』（1936 年）など 4 冊の野上の著作を見る限りは，フランス語圏心理学の研究成果，すなわち，教育実践，教育臨床に資する内容がほとんど生かされているようには思われないのである。

後に，独自のフランス語圏心理学研究を行なう宮城（1977）は，昭和 6 年に京都帝国大学文学部を卒業した学生であるが，「野上先生の講義はフランスのリボーその他，外国の本の翻訳だった」と述べ，紹介者としての野上にふれているのみである。

野上は，1960 年に，上記のように影響を受けた何人かの海外の研究者に関する講演を行ない，ヨーロッパとアメリカの古い心理学の研究を掘り起こす意義を語っている。そのこと自体は心理学史研究の点から注目されてよいかもしれない。

2.2. 教育科学としての人間学

2.2.1. 城戸幡太郎の学問的態度

1950 年，城戸幡太郎（1893-1985）は，アメリカの雑誌〝World Psychology〟の依頼をうけて〝Psychology in Japan〟を書いたが，結局未公刊となった。その和文草稿をもとにした論文が「日本心理学史考 —— 第 2 次世界大戦の終わるまで」（城戸，1964）である。ここで，戦前の理論心理学，実験心理学に次いで応用心理学の問題に触れている。応用心理学は，教育心理学，産業及職業心理学，犯罪心理学の領域を対象にしているが，城戸によると，「これまでの日本の心理学的研究の方法と結果を見ると，真に応用心理学と称せらるべきものは少いようである」とされ，それは，「日本の心理学者の興味が理論的研究にあったことと，心理学に対する社会的要求の不足と経済的条件の貧困とが，心理学を科学から技術へ発達させなかったからである」とされるのである。そして，「犯罪心理学のみならず教育心理学においても最も必要が認められてきたのは臨床心理学」であるとして，戦前官庁でおこなわれた「実際問題解決」に資する心理学研究を一定評価したうえで，戦後のこれからは「精神診断学や精神治療学として発達するであろう」と期待をこめて記している。

この論文は，実質，戦後の 1950 年までに書かれたもので，戦前の日本心理学と戦後の日本心理学を比較して，将来の日本心理学はどうあるべきかを反省し将来の日本心理学に何を期待するか，という思いが込められていた。その独自の立場からであったにせよ，城戸が，かかる期待を臨床心理学に寄せていたものと受けとれる。また，1951 年の，雑誌『教育』における大田堯との対談においても，戦前の北海道における生活綴方教育運動などにふれながら，子どもたちの「生活」にたいする自覚を教育の課題として強調し，「地域に立つ教師」であることを勧奨

している。「教育は人間を問題として社会を発達させること」という城戸の心理学・教育学に対する態度の源泉はどこにあるのだろうか。

もっとも，城戸自身は直後に北海道大学教育学部長に任ぜられ，就任後にそのような研究領域に対する関心を直接発展させたわけではない。そのことは「城戸幡太郎先生著作・論文目録」(鈴木・廣川，1984）や「城戸幡太郎著作文献目録」(高橋・清水，1998）を概観しても伺い知れるが，城戸の戦後の日本の臨床心理学領域，とりわけ教育臨床への関心の様子には関心がもたれるところである。

2.2.2. 生活を自覚する心理学

ところで，戦前－戦後復興期の心理学に今日の教育臨床領域における課題の萌芽，その問題の所在を見ようとする本論で，第一に再検討したいのが他ならぬ城戸自身の実践・研究である。確かに，これまで，城戸の戦前の実践と研究をそのまま臨床心理学的研究とする見方はされていない。しかしながら，今日の時点であらためて振り返ってみるならば，「精神薄弱」研究の領域における城戸の精神医学者・教育実践家らとの共同研究は，この領域の先駆者としての位置を占めることが理解されるものである。少なくとも，今日にいう発達臨床心理学領域の歴史的研究を行なうにあたっては，城戸を再評価することが必要になる。

高橋（1998）は，戦前の「精神薄弱」研究を，年次別につぶさに検討して形成過程を4期に区分し，今日の時点でなお城戸らを高く評価している。

それは，知能測定による研究を第一とした時期にあって，「知能だけでなく，『生活能力』のパースペクティヴで『精神薄弱』という障害をとらえたこと」にも見られる先駆的な総合性による。戦後，1960年代以後になって国際的な流れとなるそのようなパラダイムシフトともいうべき問題提起が，1930年代になにゆえ城戸らにおいて可能となったのか。そのような問を立てて，高橋は，「城戸らは，1930年代の教育科学研究運動のなかに『精神薄弱』問題を中心とした障害児教育（保育）研究部門を組織し，新たに構築しつつあった教育科学や心理学，児童学研究においても障害児教育問題を明確に位置づけた」ことを重く見るのである。研究者が，「従来のように『普通教育学』と『特殊教育学』，『一般心理学』と『精神薄弱心理学』に分離・分化させてとらえていくのではなく，教育科学や心理学，児童学のなかで統合的に行うことを志向していた」と指摘する。このような志向が大いに重要であり，たえず議論して問い続けられるべきであることはその後の歴史が教えている。

大泉（1979）は，広い歴史的視点から「1930年代日本の教育科学運動から学ぶ」と題して，城戸の科学性と実践性の形成過程を詳しく論じている。また，高橋・清水（1998）は，1930年代から今日までの障害児教育の歴史的展開，とくにその理論史上の発展と課題を，「特殊教育の近代化」から「障害児教育の現代化」への歴史的位相ととらえ，そのなかに城戸の教育科学と障害児教育理論を定位する試みを行なっている。ここでは，戦前の城戸の研究，あるいは教育科学の運動が，現代とどのように切り結ばれるのかを問う「通史的考察」を課している。さらに，今後の研究の課題として，「その基盤となった幼児・児童の発達と教育に関する彼の心理学理論との関係」を深めること等が，「城戸幡太郎の全体構造を視野に入れての研究」の必要という観点から提起されている。これは，すぐさま，われわれの教育臨床研究にかかわることである。

城戸の心理学における特徴のひとつは，全体へと統合する志向と社会のなかでの「生活」の

自覚であった。これを，フランス語圏心理学の影響という観点からみたらどうであろうか。例えば，Wallonは，先に紹介したように1938年に *La vie mentale*（『精神生活』）という大部の事典の編集を行なっているが，フランス語圏心理学において，La vie mentale（精神生活）はしばしば登場する伝統の概念であり研究テーマなのであった。

2.2.3. 北海道大学「城戸幡太郎文庫」調査から

城戸幡太郎を戦前の代表的心理学者であり，今日でいう障害児臨床心理学・発達臨床心理学領域，すなわち教育臨床研究の先駆者とみなした場合，その学問的態度に影響を与えたのは，自ら述べているように(城戸，1978)，なにより障害児童教育に実践的に近づいたことにあるだろう。また，ドイツ・ライプチッヒ大学留学中（1922年～1924年）に，補助学校（Hilfsshule）等の実践を見学したことも影響を与えている。事実，ドイツの「精神薄弱」教育に関する引用紹介は多い。そうした既知の事実は清水のインタビュー(1981年)によって確認されている(「ドイツ留学と新しい『精神薄弱』児教育思想の摂取」高橋・清水，1998．所収)。しかし，本論の研究課題にかかわって，フランス語圏心理学はどのように影響していたのかはこれまで検討されたことがないのではないか。

諸著作においても，城戸が，英米独の心理学，哲学，教育学などに学んでいたことが伺い知れるが，「ビネーの精神整形学と心の素質」（城戸，1932）を著していることを含めて，フランス心理学にある程度通じていたことは意外に知られていない。しかしながら，戦前からフランス心理学導入に大きな役割を果たしたことで知られる波多野（1978）は，「わたしは，城戸先生一人をたよりにして，フランス心理学の状況に対する理解を深めていった」と記しており，城戸がRibot，Binet，Delacroixなどに通じていたことが紹介されている。

そこで，現在北海道大学大学院教育学研究科が保管し，現存する「城戸幡太郎文庫」の蔵書について，北海道大学教育学部創設40周年記念事業実行委員会編（1989）『城戸幡太郎文庫目録』を参照しながら実際に点検し分析・検討を加えることにしたい。もとより，北海道大学「城戸幡太郎文庫」に蔵書のすべてが収納されているわけではなく，また単行本のみを対象にすることには無理があるが，ある程度の傾向は把握できる。

(1) フランス語圏心理学関係の分野別冊数と著者

収納されている洋書全1364冊に占めるフランス語の心理学・哲学・教育学の関係資料は，175冊である。表1には，分野別冊数を掲げた。時代的制約を受けて，区分けは厳密にはむずかしく，以下はそのまま40周年記念事業実行委員会の分類に従っている。表2は，著者別の冊数である。

(2) 蔵書の刊行年代

図1に，蔵書の発刊年別分布を掲げる。1900年～1925年頃および僅かだが1950年前後に集中している。1931年～1946年の文献はほとんど見られない。ドイツ留学中に入手した文献が多いことが察せられる。

(3) 病理的心理学関係の文献

厳密な分類は困難であるが，めぼしいものをあげると以下のような図書である。

表 1.「城戸文庫」の分野別冊数*

心理学		67
	総論	17
	実験・臨床	22
	社会・発達	28
哲　学		36
教育学		3
その他	民族・地理・歴史	28
	政治・経済・社会	21
	芸術・文芸・言語	17
	宗教・神話	3

＊類別の可能の範囲

表 2. 著者別冊数

Ribot, T.	12
Le bon, G.	8
Rousseau	8
Dumas, G.	7
Bergson, H.	6
Fouillée, A.	6
Comte, A.	5
Vortaire	5
Binet, A.	4
Tarde, G.	4
Delacroix, H.	3

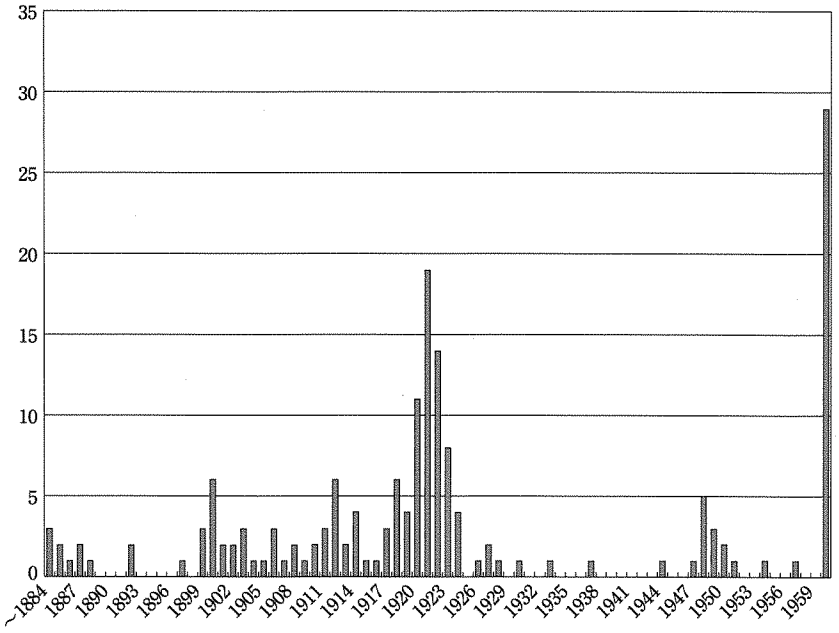

図 1. 蔵書の発行年別分布

・Janet, P: *L'automatisme psychologique*. Alcan. 1889.
・Binet, A. *L'Ame et le corps*. Ernest Flammarion. 1918.[2]
・Ribot, T. *Les maladies de la mémoire*. Alcan. 1920.[3]
・Dumas, G. *Traité de psychologie*. Tom1, 2. Alcan. 1923/1924.

[2] ビネとシモンの知能検査は英語版（The development of intelligence in children. The Binet-Simon scale. Williams & Wilkins. 1916）で学んだようである。
[3] リボの中期の三部作（「記憶の疾患」「意志の疾患」「人格の疾患」）は，山田吉彦（きだみのる）訳『リボオ變態心理学』（聚英閣，1925）として訳出され出版されている。

なお，ドイツ語の Freud, S. の著作が 3 冊，Jung, C の著作が 2 冊ある。

2.2.4. フランス語圏心理学の影響

蔵書調査では制限があるが，これから一定の類推は可能であろう。

すなわち，城戸におけるフランス語圏心理学は，ドイツ留学時代（1922 年～1924 年）に接したヨーロッパ心理学のひとつの流れと受け止めて文献を揃えたものと思われ，帰国後の収集はごく僅かにとどまったと見られることである。実際，ペーパーナイフの入っていないものも多く，むろん全点に目を通したという形跡はない。比較的読み込んだと考えられるのは，波多野（1978）が記しているように，Ribot と Binet ということになるであろう。しかし，法政大学児童研究所の活動を開始（1929 年）し，雑誌『教育』（岩波書店）を刊行し始めた頃（1931 年）には，すでにフランス語圏心理学の単行本の購入はほぼ途絶えたと見てよかろう。

1930 年代における「児童学研究会」や「教育科学研究会」の議論と研究運動は，今日なおわが国の教育学・心理学研究に重要な問題提起を行なっているものであるが，これを中心的に担った城戸自身が，フランス語圏心理学の影響を強くうけていたと見なすことはできないようである。すなわち，少なくとも，ヨーロッパ学問の危機，あるいはナチズム台頭に抗して独自の発展をとげた 1930 年代以後のフランス語圏心理学の慧眼には接することはなかった。城戸の作品に，1930 年代以後のフランス語圏心理学の成果の反映を見て取るのはむずかしい。おそらく，「波多野完治氏に指示し，便宜をはかった人」[4] すなわち指南役または後見人としてわが国にフランス心理学が入ってくることを見守った，ということになる。

しかし，そうであるとしても，Ribot らに見られる進化論や病理的心理学，あるいは Binet の方法など人間を全体として見ようとする研究の態度には啓発されるところがあったのではないか。Ribot は，1968 年の『心理学問題史』（岩波書店）においても，Rousseau，Bergson など他の哲学・思想家と同様にしばしば参照され紹介されている。フランス語蔵書全 175 冊のうち心理学書はわずかに 67 冊であることを見れば，むしろ，フランス語圏心理学自体に脈絡あい通ずることであるが，城戸は欧米の哲学・思想・文化などの総体をもって日本の教育の現実に向かったということができよう。むろん，城戸が東洋の学問にも造詣が深かったことは周知のことであって，そのことを加えてのことである。

今日，Ribot, Dumas, Janet, Wallon を初めとする 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのフランス語圏心理学の大御所たちの蔵書を探索すると，意外にも小樽商科大学附属図書館「手塚文庫」がかなりの点数を所有していることがわかる。それも希覯本が揃っている。これは，小樽高等商業学校に 1919 年から 1942 年まで在職した経済学者手塚寿郎（1896-1943）のコレクションである。手塚は，小樽高等商業学校を経て東京商科大学に学び，赴任の翌年 1920 年から 1926 年まで 5 年と 4 ヶ月間フランス・パリに留学している。城戸とほぼ同時代の人で，留学した国は異なるが，年代は重なる。第 1 次世界大戦の直後にあって，ヨーロッパの通貨は切り下げられ，日本円は歴史上最高の価格をもつほどになる。手塚はセーヌ河畔の書店で書物を買い求めたという。ちなみに，文部省在外研究員へは旅費の他に月 360 円の学費が支給されたが，生活費は 200 円乃至 250 円であった頃で，手塚はその他の費用をほとんど書籍代にあてた（小樽高商史研究会編，2002）。この時の書物のなかに，先のフランス心理学関係書が含まれている

---

[4] 滝沢武久氏への加藤義信氏（愛知県立大学）と筆者の共同インタビューによる（2003 年 2 月 16 日）。

のである。

「手塚文庫」の目録は，『フランス社会思想文献目録』（坂田他編，1966）として刊行されているように，手塚の社会思想研究のなかにこれらのフランス語圏心理学の重要文献が位置していることが伺える。城戸の場合はドイツ・ライプチッヒであったが，手塚と同じような条件があったものと思われ，フランス語圏心理学も社会思想，人間学の意味合いにおいて求めたものではなかろうか。

教育学の内島（1999）は，「1930年代の教育科学運動のリーダーがなぜ心理学の分野から生まれたのかという問題があり，城戸の理論形成史を含めてとらえ直す必要がある。教育学が早くから体制の学となっていた状況のなかで心理学も当時，実験科学として自己の役割を限定する確立期を迎えていた。しかし，それ以前には日本における心理学は啓蒙思想と結びつきながら社会的視点での人間形成の学をめざしてきたという一面をもっている。城戸はこの伝統を自覚的に選びとったのである」と述べている。本論の主題にかかわる実に重要な指摘である。「城戸幡太郎文庫」の蔵書は，このような指摘の妥当性を裏付ける。

2.3. フランス語圏心理学の研究者の登場

経歴から見る限り，わが国でもっともフランス語圏心理学に近かった研究者は宮城音弥（1908-）であろう。京都帝国大学文学部哲学科心理学専攻を1931年に卒業し，1934年にフランス政府招聘留学生として渡仏している。この宮城の経歴と業績はよく知られ，『心理学入門』，『精神分析入門』などの新書で，少なくともある時期に高校生や大学生に心理学のひとつのイメージを与えた。しかし，間宮（2001）も文献解題で述べたように，その「独特のもの」を理解することが必要であり，実際に宮城の心理学を理解することはむずかしい。その「独特のもの」こそフランス語圏心理学にほかならないのである。「フランス心理学の伝統はデュマやジャネのような心理学であって，『病理法』つまり，病的なものを土台にして，ふつうの人の心理を研究する方法を用いたものであったし，人間全体に興味をもったものであった。私はこの伝統にしたがって心理学を研究しようと考えていた」（宮城，1977）と述べているように，宮城は，コレージュ・ド・フランスでDumasやJanetらの講義を聴講した数少ない心理学者である。

フランス留学中は，慶應大学の精神神経医学者三浦岱栄といっしょであったという。サンタンヌ病院で研修し（すなわち医師の外来診療に立ち会うことである），Piéronの心理学研究所にも出入りしている。宮城は，「ピエロン教授の研究範囲も，日本の学者ほど狭いものではなかった。私が卒業論文に『睡眠』を扱ったときには，すでに，その『睡眠の研究』を読んで，それを引用しているし，未開人心理についてのすぐれた見解も私を感服させた」と評している。また，ストラスブール大学のBlondelのもとでの研修は，「発達心理学は教師を養成する師範学校の附属でやって，児童をよび出して，一種の臨床講義を行なったし，異常心理学はパリと同様，大学病院で患者の供覧を行ないながらの講義であった」というようなものであったという。

宮城は，帰国後1942（昭和17）年，昭和医学専門学校で医学を修めて医師になっている。当時，フランス語圏心理学の伝統を重んじてわが国で研究と実践を行なおうとするには，医師になる以外には厳しい制限があった。「心理学者が医学をも専攻するのがフランスの伝統であったことはすでに述べた。医学を勉強して私はフランスの先生たち――デュマ，ジャネ，ブロンデル，ワロン――をいままでよりもよく理解し，その線に沿った研究をさらに進めることができるかも知れないと喜んだ」という。精神科医師の仕事をしながら海軍技術研究所で，主に性格

の研究や流言飛語に従事している。戦後は，鶴見俊輔らの『思想の科学』に協力し，清水幾多郎らと交流。また丸山真男との「主体性論争」で知られる。1948年結成の民主主義科学者協会心理学部会に関与。1949年には東京工業大学の教授となり，直接的には医学・臨床畑から離れることになる。

多彩な評論，世評でも活躍したが，「心理学はユマニスト（人間論者）の伝統を受けつぐものと考えている」という宮城の心理学が理解されるためには，生きた時代背景とヨーロッパの，とりわけフランス語圏心理学の伝統を受け入れ理解する態勢が必要であり，さらに独自の「臨床社会心理学」の理解が必要になるであろう。精神分析学やユング心理学をはじめ多くの理論に基づく心理臨床の研究と実際が行なわれており，宮城が活躍した時代には考えられなかったほどに臨床心理学が発展・普及してきた今，宮城が渡仏した時代が1930年代であったという歴史認識をあらたにしつつ，宮城の果たした役割と業績を再評価すべきであると考えるのである。

3．精神医学者による研究

3.1．先達の医学者

フランス語圏心理学が，これまで幾度も紹介したように病理的心理学を基盤にする伝統がある以上，導入の主要な担い手が今日にいう精神医学者になるのは自然なことであったかもしれない。今村新吉（1877-1946）は，1897（明治30）年，東京帝国大学医科大学医学科を卒業後，1899（明治32）年にオーストリアに留学している。ウィーン大学Obersteiner教授のもとで中枢神経の解剖や生理の研究を行なっている。次いで，パリ大学医学部神経病学講座初代教授Charcot没後のサルペトリエールに学んでいる[5]。すなわち，明治期にフランス神経学に触れた人物である。1903（明治36）年帰国。帰国後すぐに京都帝国大学医科大学精神病学教室初代教授に就任。当時は「精神病学教室」であり，神経学と精神医学の分離は明確でない点ある程度留意しなければならないだろう。1934（昭和9）年まで在職した。1926（大正15）年，1928（昭和3），1934（昭和9）年とフランス政府から勲章を授与されている。

逸見（1975）は，今村の論文集に寄せた通信のなかで，その経歴にふれて次のように述べている。「今村先生が東大を卒業された明治30年は，わが国の医学史のうえで重要なエポックを迎えていた。明治政府の医学センターだった東大医学部と幕府医学館の流れを守ろうとする漢方医の団体の間の抗争に終止符がうたれ，明治政府が完勝した頃にあたる。他方，わが国の近代精神医学創設者の一人，榊俶がこの年に亡くなっている。（中略）精神医学教室は，先にも述べた通り，榊教授が亡くなった年で，法医学の片山教授が主任を代行していた。生理学教室に一年おられて，私費留学生としてウィーンに行かれた先生は，そこで神経病に興味を持たれ，後にパリのサルペトリエールへ移られたらしい。多くの神経病医が世界中からシャルコーのもとに集まった時代である。しかし，留学時代の先生については，ウィーンでエコーモと親しくされていたこと以外，不思議なほど伝えられていない」。すなわち，「文部省は，当時のことであるから，ドイツ語圏での勉学を期待し，先生もクレペリンに対しては終生敬意を表しておられたようである。したがって，先生とサルペトリエール学派との出会いが，何時，どのような

---

[5] シャルコーに学んだ神経学者に三浦謹之助がいる。1892年のことで，シャルコー最晩年のことである。三浦の後押しで，1906（明治39）から1911（明治44）年にかけて，佐藤恒丸訳『沙禄可博士神経病臨床講義』全3巻，東京医事新誌局．が刊行されている。シャルコーの『火曜講義』を『東京医事新誌』に長期間連載されたものだという（江口重幸，1999）。

形であったのかを知りたかったのだが，この稿では調べられなかった」としている。今村は，自分をあまり語らなかったうえに大戦時の空襲で神戸の自宅とともに蔵書・資料が消失したのである。

ただ，まずウィーン大学に学んだこと，そしてフランスの神経学に関心を寄せて，パリに向かったことは確かである。心理学者城戸幡太郎がライプチッヒに留まってフランス語圏心理学にも関心を寄せたということに比べると，今村は実際にサルペトリエールに学んでいるという違いがある。野上は，コレージュ・ド・フランスでJanetの講義を受講はしているが，今村の如くに実際の臨床研究に接したわけではない。

今村が退官する1年前に精神病学教室に入局した村上（1975）によると，京都帝国大学在職中の今村は，精神病理学の研究に関心を持ち，神経学の臨床と病理にも精通し，晩年には，失語，失認などの大脳巣症状に深い興味をもっていたという。また，村上は，「先生は，御尊父[6]の影響もあったせいか，フランス語に極めて御堪能であり，フランス文化にも深い愛着をもっておられ，学生への講義にもフランスの精神医学の文献をよく引用されたので，先生の学風を『フランス学派』などと呼ぶ人があるが，先生の学問的視野は決してそのように狭いものではなく，欧州各国の精神医学的研究に広く精通しておられた」と記している。また，Bergsonの著作を熟読していた。このような広い学識にあらためて注目しておきたい。

『今村新吉精神医学論文集』（今村，1975）に収められた8篇の論文のうち，フランス語圏心理学の影響が色濃く出ているのは4篇である。「精神分離症の心理学的説明原理としての社会的本能欠陥」（『哲学研究』第140号，1927年）は，ストラスブール大学のBlondelの病的意識をわが国に初めて紹介したものである[7]。今村は，「私の抱く考察に最も近きものとしては，文献中唯だ一を見出し得たのみであって，それはシャルル・ブロンデル氏が病的意識に就きて提案したものである」と記している。そして，BlondelがLévy-BrühlとBergsonによって自説を展開していることを紹介している。「ヒステリーについて」（『北野病院業績報告』第1巻，第1号．1929）には，「欧州大戦ニテ得タ『ヒステリー』ニ就テノ知見ノ一部ヲ遅レバセナガラ紹介シタ」と但し書きが付いている。第1次世界大戦をはさんで，ヒステリー研究が「心理学的，生理学的現象の接触帯を究むる」ものとして神経学者に大きな影響を与えていたことが了解される。のみならず，今村は戦争が庶民に与える影響について言及しているのは注目されることである。「現時仏軍中に生じたる特殊病に就いて」（『北野病院業績報告書』第1巻，第1号．1929）は，文字通り第1次世界大戦時のフランス兵に多発した戦争神経症（N'evroses traumatiques）辺縁の問題について論じている。この問題は，DumasやWallonら，実際に負傷者の診療を行なった若い精神科医師たちに大きな影響を与えた領域なのであった。「ピエール・ジャネー氏の最近の精神病理学研究（『北野病院業績報告』第3巻．1941）は，Janetの「被害妄想における感情」（1932）を講演時に解題したものである。

このように，今村は，わが国おいてはもっとも早くにフランスの病理的心理学をかなり克明に，かつ今日の時点で見てもその高い水準を保って紹介した精神神経医学者であったといえよう。略歴譜を見ると，1909（明治42）年には「文科大学精神病学授業担当ヲ命ス」（京都帝国大学）とあるから，医科大学以外の学生が今村の授業を受講していることになり，学問的影響が

---

[6] 今村の父有隣は，第一高等学校のフランス語教授で，日本で最初のフランス語文法書を著述している。
[7] 宮城(1977)は，今村が1927年に精神神経学会特別講演でブロンデルの学説に触れていたことを紹介している。

あったことが類推される。その学識と人格には，医学生はもとより各界から定評があった。若き野上俊夫が京都帝国大学文科大学講師になったのは 1908 年のことで，受講したかどうか確証はないが，帰朝後数年後経って理解も進んでいたであろう今村の講義を聴いた可能性がある。

また，今村は，ドイツの精神医学・神経病学，フランスの病理的心理学を導入したという先駆者の位置にあるが，同じく逸見（1975）によれば，問題児や非行少年に強い関心を抱いていたといわれる。「異常児や犯罪者には，いわゆる診察では汲みとりえないものが多いから，彼らの生活への共感が無くてはならず，また，それのできる場をつくらなくてはならない」と説いて，神戸の武庫の山中に保護児童の学園をつくって終生の仕事にしたい，と洩らしていたという。事実，晩年の第 2 次世界大戦中に，兵庫児童研究所等にも出かけて診療し，若い医師を個別に指導していたのである。これは，高木（2003）によれば，今村のもとで，1932（昭和 7）年にできた診療・相談機関であり，はじめに医師・速水寅一が派遣されていたとのことである。

このような今村の精神医学は，ヨーロッパ精神医学全体を鳥瞰するものでありながら，かつ，わが国の児童の教育の問題にまで及んでいる点で，同時代の東京帝国大学三宅鑛一，後輩の杉田直樹らと通ずるものがある。

3.2. 精神医学における継承・発展

今村新吉に続いて，京都大学医学部の村上仁（1910-2000）の努力によって，わが国ではフランス語圏心理学を含めた広い視野の精神医学・心理学研究が可能になっていたといえよう[8]。「ヤスパースを何とか越えよう」という村上のフランス留学（1938-1939）であったという（関根・松本，1997）。村上は，インタビューに応じて，今村の影響で Janet に関心をもったと述べている。戦雲急のヨーロッパ事情のなかで，村上の留学も落ち着かないものであったようである。

村上の『精神分裂病の心理』（村上，1943）は，Janet の影響で書かれたものだが，「今日まで現れた種々多様な学説をある一定の心理学的立場から統一的に解釈することによって，本病の心理に関する具体的な全体像を得んとするにいたった」として，Janet の心理学理論形成における Piget，Wallon，Lévy-Bruhl などの影響について述べている。ただし，「当時の学会では，精神病理学なんていうものは無視されていました」と反響がなかったことも語っている。戦後の精神神経医学は，村上がここで述べていたように，「遺伝生物学的及び身体病理学的研究の進展」を遂げる一方でアメリカ力動精神医学が盛んになってくるが，村上は戦前からのフランス語圏心理学研究，病理的心理学を継承・発展させたのである。

さらにまた，村上（1952）は，Wallon を「独創的」とも評価していて，早くからフランス心理学における psychogenèse の理解者でもあった。Ribot，Janet，Wallon に代表される発生論的研究への関心である。これから必然的に子どもの精神医学に関心が向いてくる。こうした村上の考えもあり，戦後の 1955 年，高木隆郎らが京都大学医学部付属病院で児童精神科外来にとりくむことになる。ここでフランス語圏心理学の発達・臨床の心理学が大いに導入・紹介されることになるのである。

木村（1960）は，日本児童精神医学会の機関誌で，Wallon, H: Psychologie et éducation de l'enfance. 1959 を紹介している。学会誌の第 1 巻 2 号に，1 ページのすべてを使って Wallon の 8 点の代表著作を紹介している。これは，Wallon が亡くなる 2 年前ことである。村上が「独創

---

[8] 榊保三郎の九大，三浦岱栄の慶應大も重要な役割を果たしたが，ここではふれず，別の機会としたい。

的」と評価したとは言え，Wallon 自身がフランス語圏心理学，病理的心理学の伝統をほぼ正統的に引き継いでいたことを考えると，それまでの Ribot, Dumas, Janet らに至るまでの膨大な蓄積を修得していなければならないはずである。それが今村，三浦，村上と続いた京都大学医学部精神病学教室，精神医学教室には当時保たれたということになろう。京都大学附属図書館に残る図書カード目録には，Janet や Wallon その他の著作を入れた人物の名前が記載されており，歴史を思わせるものがある。村上・荻野（1965）は，その一大集積といえる論文といえようか。末尾の「ジャネとフロイト」の最後に，「このような新しいフランスの心理学の傾向が今後どう発展するか，またことに現在アメリカの心理学の影響が強いわが国で，これがいかにとり入れられるかは今後の問題であり，またわれわれの努力すべき課題であろうと思われる。そしてまたこのような意味においても，このようなフランス心理学の伝統の基礎の一つになっているジャネの行動心理学が，もっとわが国においても理解されるべきではないかと考える」とある。

ちなみに，1927（昭和 2）年，京都帝国大学文学部哲学科心理学専攻を卒業し，1931 年に京都府立医科大学を卒業した小谷庄四郎教授の京都府立医科大学精神神経学教室からも，石田卓，山口俊郎らが出てフランスの発生的精神医学の研究が行なわれている。

わが国では，Ellenberger のすぐれた歴史概説によって Janet が再評価される機会が得られ，さらに 1990 年代以後は，Herman，Van den Kolk らによる Janet 評価の大きな影響が見られる。この様相をみると，臨床で現実の問題となっている児童虐待や PTSD への関心が背景にあるとはいえ，いかにも英語圏アメリカ経由であるさまが否めない。

III. 戦後のフランス語圏心理学の研究

1．児童精神医学領域における理論的役割

心理学者として野上俊夫，城戸幡太郎，そしてフランスから帰国後に医学を修めた宮城音弥の業績。精神医学者として今村新吉，村上仁といった先達の業績を中心に戦前のフランス語圏心理学の導入状況について論じてきた。この他に，本論では直接ふれてこなかったが，周知のように発達心理学の領域においては波多野完治が重要な研究を成している。しかし，ここまでにフランス語圏心理学が定着したと見なすことは到底できない。

概観すれば，戦後は，榊保三郎の九州大学医学部，三浦岱栄の慶応大学医学部をふくめて，いくつかの大学の研究室において継承されることが期待されたわけである。そして，戦前からの研究遺産は，事実，それぞれある時期まではそれなりに引き継がれていたのであった。

もとより，研究と実践においては，民間の先駆性を決して忘れるべきではないが，フランス語圏心理学の臨床的研究の継続という点から，ここでは大学近辺の状況について論じる。以下では，上記の流れに沿って，京都大学精神医学教室関係の状況と東京大学教育学部の場合を中心に検討する。

1936（昭和 11）年，名古屋医科大学附属病院に，杉田直樹教授のもとでわが国初の児童治療教育相談室が設置された。次いで，同年東京帝国大学脳研究施設に，アメリカ留学から戻った村松常雄らにより児童相談室（Child Guidance Clinic）が開設されている。戦後の 1955（昭和 30）年には，京都大学医学部附属病院精神科に，村上仁教授のもとで児童精神科外来が開設されている。名古屋医科大学の外来を担った堀要は，戦前 1938（昭和 13）年暮から戦雲急を告げ

るなか，わずか3ヶ月だがドイツ・ライプチッヒにSchröder, P.を訪れている。わが国でもっとも早くに児童の専門外来を設け，また多くの研究を行なってきた名古屋大学だが，その後の堀の影響もあり，「フランス学派」は必ずしも定着しているとは言いがたい。

一方，京都大学には，前述のように，少なくとも学問的背景としてフランス語圏心理学の影響があることがわかる。そのことは戦後しばらくの間は相応の意味あいを有していたのである。高木（2003）による教室動向の詳しい経過記録に，「われわれが築いた京大の児童青年精神医学は，ネイティブ・チャイルドサイカイアトリーといわれ，独自の発達を模索したことを自ら誇りとしていた」とある。2点だけに留めるが，「フランス学派」のひとつのかたちであるナンシー大学・Schachter, M.（1976）の自閉症に関する論文の翻訳・紹介やラカン派児童精神分析のMannoni, M.(1967)の翻訳・紹介もある。Schachterの論文は，フランス児童精神医学がKannerやAspergerの考えから独自の距離をとっていて，1970年代に至ってようやく彼らを取り入れたことを示している。しかも，それが単に「時代遅れ」と見なせる内容ではなく独自の検討を行なっていたのである。論文解説者の高木が，「輸入文化，翻訳文化」とわが国の現状を嘆いている。このように，今村の時代から，少なくとも独・仏・英の学問的動向を吸収する態度があったことは伺える。そのなかで，比較的にフランスの比重が高いということであろう。

京都大学医学部におけるこのような研究状況は，新設の教育学部にもある程度影響したことが伺える。1954年当時，教育学研究科大学院生であった畠瀬（2002）は，学部内に設けられた相談室のむずかしい事例を医師・黒丸正四郎教育学部非常勤講師に相談し，「医学部で開かれている精神医学臨床講義にもぐり聴講をした。三浦百重教授，村上仁教授の講義に3年間通った」と記している。畠瀬自身は，その後，ロジャーズのもとに直接留学を果たし，同時に強い影響をうけているが，このような学習体験をもっていることになる。

名古屋大学の堀（1975）は，わが国の戦前昭和10年頃の医学も巻き込んだ児童研究ブームを回顧して，「むしろ外国の影響によってではないか」と喝破している。堀の指摘をそのまま是とするわけにはいかない部分もあるが，わが国においては，外国の影響が常に実践に及んできたという事実は再認識しておく必要があろう。医学部・付属病院の研究状況は，医師の勤務先に及び，さまざまな関係において遍く検討される必要がある。

2．わが国「発達保障論」とフランス語圏心理学

滋賀県・近江学園の実践と集団的討議を中心に誕生した，わが国「発達保障」の思想の黎明期におけるフランス語圏心理学の影響について述べる。この点については間宮（2004）が少しふれている。

フランス語圏心理学を含む外国の影響がないというのではないが，この理論の形成過程は，今日的に見て稀有な独自の過程であることに注目しておきたいのである。すなわち，外国からの単なる「輸入」ではないという点において際立つものがある。これについて，中心的役割をになった田中（1997）が，1950年代からの「発達保障論」の位置づけと自らの役割をあきらかにしながら詳細に論じている。わが国「発達保障論」の思想がもつ歴史的な重みが伝わるものである。

しかし，清水（1981）が，この理論的検討の過程においては，1947年に出された「ランジュヴァン・ワロン教育改革計画」に負うところが大きかったと記すように，フランスで培われた人権思想，教育思想，教育学の新しい考えは注目すべきものだったのである。田中(1997, 2003)

も同様に，「ピアジェ，ワロンの論争から学び，ランジュヴァン・ワロン教育改革計画にある障害のある場合の教育制度の不十分さを克服したいと思っていました」と回顧している。計画「序説」において，「正義の原則 principe de justice」が第一に述べられているのをはじめ，教育課程や教育方法が掲げてある。また，「付」として，「知的障害者のために」とある。これは，1947年という時代背景を振返れば，かなりの内容を有するものであるが，田中（1997）によれば，「障害の重い人もふくめて正義の原則が十分徹底しているようには思えなかった」こと，また，「当時紹介されていたワロンの発達理論がピアジェとの対抗論理としての性格が前面に出ており，それをさらに弁証法的に精緻なものにする必要を感じはじめていた」ということであった。

1960年代以後，理論構築の過程であらわされた田中（1980a，1980b）の論文では，Piagetの原著の読みこみをはじめ世界の発達理論が検討されている。Wallonにもふれられている。わが国「発達保障論」の中心思想は，「障害者の発達と権利の保障」を追求することに他ならない。これはランジュヴァン・ワロン教育改革計画にいう「各人の能力に対して，可能な限りの発達をはかること」（第2，A，1）と合い照合することであり，理論的追求の広範さと緻密さにおいて，フランス語圏心理学が一定寄与していると見なしてよいだろう。

3．戦後復興期の教育学とフランス語圏心理学

波多野(1983)が述懐するように，「東大文学部心理学教授はピアジェについて一言も言わず，教育学部においても，ピアジェは教育と関連して教育学研究室において解説されるに止まる」のであった。かかる状況について，滝沢武久も同様に回顧している。この教育学研究室とは，勝田守一の研究室のことである。「日本の社会と子ども」（勝田，1952）は新潟での講演記録であるが，世界の新教育における児童心理学の動向にふれ，ランジュヴァン・ワロン教育改革計画も紹介している。「子どものために考えその成長を念願する教育は科学的立場に立たねばならないと思います。第一に心理学があげられると思います」と語るのである。ここで勝田が期待した心理学のひとつが，ソビエト心理学と並ぶフランス語圏心理学であり，とりわけ自我の形成と能力の発達にかかわるWallonやPiagetの心理学であった。「教育学の研究者が，実践を媒介としながら自らの理論（法則性の形成の成果）構築のために，それにふさわしい心理学的研究に身を献げなければならない」と勝田は考えたのである。

勝田編（1958）『教育学』第1章，「教育の概念と教育学」においては，まず，新教育と教養に言及したWallon（1932）の「一般教養と職業指導」（原文）にふれられ，Chauchard, P.（吉倉範光訳）の『言語と思考』（クセジュ文庫，1957年），Durkheim, É.（田辺寿利訳）『教育と社会学』，Gurvitch, G.などフランス語圏の研究を参照している。Chauchardは，わが国の文庫クセジュにたくさんの訳本があるパリ大学の神経生理学者である。

その後，勝田（1964）は，雑誌『教育』において連載された教育学入門の連載をまとめた。この段階では，人間の能力をどうとらえるか，人間が成長するとはどういうことか，人間の学習を指導する条件は何か，能力の発達と人間的価値の実現とはどういうことか，これらを戦後のわが国の教育状況を踏まえて論じたものである。教育科学研究会等での教育実践家たちとの議論をふまえて，子どもの能力の発達と学習という問題は教育学に欠かすことができない重要な課題である，と勝田は考えていた。先述の新潟講演（1952年）では，冒頭，「私は子どもの問題については専門ではない」とことわって話をはじめた勝田が，ここにいたって子どもの教育学をかたちづくることになる。

「人間の発達は複雑な因子をふくみ，多様な条件のもとで行なわれる。だから，ここでも，人類の知的遺産，国民の経験が私たちの考察に貴重な素材を提供する。私たちが教育を考えるとき，経験をだいじにするのは，決して哲学上の経験主義や経験論の立場でそう主張するのではない。教育というものが，人類の知的遺産と国民的経験にもとづいて行なわれているだけでなく，それは広い意味で一つの慣行として思想を形成している以上，私たちは，子どもの発達という現象が科学的な生理学や心理学の対象であると同じように，発達の指導，すなわち教育がすぐれて歴史的な過程であり，社会的な事象だということを認識しなければならない。したがって，教育学は，発達に関する生理学や心理学の探求をふくんだ歴史科学であり，社会科学なのだ。それは，また人類や国民に慣行として成立する教育の思想の歴史をふくまなくてはならない。とくに『豊かな内的条件の形成』という価値にかかわる問題は思想史的吟味を通して，批判的な遺産の継承と経験批判を通して解決へ向かわなければならないのである。」

勝田は教育学をこのようにほぼ定義づける。かかる勝田には，一つの機能の発達を問題にする理論では済まなくなっていたのであろう。この著作においては「ヴィゴツキーとピアジェ」という節が特別に仕立てられているが，旧ソビエトの理論家や Chauchard, Langevin, Simon, Viaud, Wallon などフランス語圏文献がしばしば引用・参照されるのである。クセジュ文庫から吉倉範光などがフランス語圏心理学の文献を次々に翻訳していたことも一助となっているであろう。なかでも，「豊かな内的条件の形成」にかかわって，Wallon の著作には原文にもあたっており，大きな影響を与えたことが伺える。しばしば参照されるのは，滝沢武久訳『認識過程の心理学』(大月書店, 1962 年. 原著は, *De l'a acte à la pensée*. 1942.), *L'évolution psychologique de l'enfant*. (Wallon, 1941), *Les origines de la pensée chez l'enfant*. Tome, 1. (Wallon, 1945) である。このような参照・検討の仕方は，当時の勝田の心理学研究が，能力を発達においてとらえるという課題に迫られていた面があろうか。その後のわが国の子ども・青年たちは，さらなる人格発達の危機，情動と感情の発達が厳しく問われる時代に入っていくことになる。

小川太郎の Wallon 研究も注目される。また，戦後における Piaget と Wallon の心理学への関心について，もう一度総括しておくべきだが，1950 年代における東京の「ピアジェとワロンの会」の研究活動（『ヒューマン』1，2，3，4，7，11，中山書店）があったことを記憶にとどめたい。

さいごに

「ヨーロッパの学者は大戦中，ファッシズムに協力するコラボトッール（協力派）と，抵抗するレジスタンス派（抵抗派）に分裂。そこから，人間価値，学問の主体が問い直された。いいかえれば，専門的学問の存在根拠が人間的に問われる現象が起こった。しかし，わが国ではほとんど全部がコラボトッールだったのに，戦後，主体が問われなかった。」

これは，1970 年代になってフランス・パリに渡った哲学者の久野（1972）による戦時下状況の回想である。フランス語圏心理学の導入と受容は，単にひとつの学派の選択というにとどまらず，精神障害をもつ人々や子どもの生存・成長を保障しようとする幅広い Science de homme（人間の科学），あるいは Science de édcation（教育の科学）の方向性を示唆するものである。本論では，Ribot から Wallon へとつながるフランス語圏心理学の流れを中心にわが国における導入と受容の過程の素描を試みたが，戦後の教育学領域における勝田らの研究を見ると，久

野が指摘するように，「人間価値，学問の主体が問い直された」時代にあって，Wallonらがレジスタンス派に属しつつ，かくも深く子どもの発達について思索・研究を行なっていたことを知って励ましをうけたという側面があるように思われる。

本論は，1960年代までの検討を中心としている。また，調査済みの事実でふれなかったことも多い。しかし，今日まで，わが国にフランス語圏心理学が定着したとは言いがたい。そればかりか，フランス文化・思想の深層部分はわが国に未だ届いていないということができるかも知れない。そのことの「損失」は大きいのではないか。

フランス語圏心理学，強いて言えば「フランス学派」はつながりがあるが，しかし同じではない。にもかかわらず，一貫したものがあるように思える。それは，ヨーロッパに延々と蓄積された哲学・思想を尊重しつつ人間の科学を社会とのかかわりにおいて求めようとする態度である。教育臨床研究は，自我・自己の形成というもっとも大きな研究課題をフランス語圏心理学から学ぶことができるはずである。

導入するわが国から見れば，青年期に東洋と欧米の言葉を広くあやつり，自己の哲学を培っていた一部の精神医学者・心理学者らが，これらのフランス語圏心理学の総合性や現実の時代に向き合う社会参加の姿勢に関心を持ち，広く導入したと思えることである。

フランス語圏心理学の体系的な修得には村上仁の時代までにようやく進展してきたフランス病理的心理学の理解のうえに，さらに現代の子どもの発達と教育にかかわる広大な学問的蓄積の理解が必要となる。だが，子どもの人格発達の危機とその対応を論じていくにはどうしても欠くことができない研究課題であろう。

本研究は，科学研究補助金基盤研究(B)(1)助成研究（研究代表者　足立自朗）課題番号13410032研究課題名　第二次世界大戦前後における教育・社会系心理学の展開とその功罪，および，（研究代表者　高砂美樹）課題番号15330138　研究課題名　日本における教育心理学の成立と展開を巡る歴史的研究，の分担研究の一部を成している。調査研究にあたっては，多くを加藤義信・愛知県立大学教授と共同で行なった。また，滝沢武久・電気通信大学名誉教授，坂元忠芳・東京都立大学名誉教授，堀尾輝久・東京大学名誉教授のご教示を賜った。城戸幡太郎文庫の調査には，北海道大学大学院教育学研究科博士課程・村澤和多里氏の協力を得た。記して感謝したい。

[引用文献]

Anzieu, D. 1992 Autobiographie. In (dr.) Parot, F. et Richelle, M. *Psychologie de langue française*. PUF.（1999　寺内礼監訳　フランス心理学の巨匠たち　SANWA. 443-457.）

Bresson, F. 1992 Autobiographie. In (dr.) Parot, F. et Richelle, M. *Psychologie de langue française*. PUF.（1999　寺内礼監訳　フランス心理学の巨匠たち　SANWA. 409-441.）

Chemama, R. 1993 *Dictionaire de la psychoanalyse*. Larousse.（小出他訳　1995　精神分析事典　弘文堂）

江口重幸　1999　Charcot神経病学の周辺　松下正明総編集　臨床精神医学講座　精神医療の歴史　中山書店. 175-194.

畠瀬稔　2002　戦時下の学習と大学院における自己実現学習と　京都大学教育学部第二期生有志著　あの頃の子どもたち　クリエイツかもがわ. 253-265.

波多野完治　1978　一門下生のみた城戸先生　城戸幡太郎　教育科学70年　北大図書刊行会. 205-253.

波多野完治　1983　ピアジェ理論とマルクス主義　波多野完治監修　ピアジェ理論と自我心理学　国土社

101-138.
浜田寿美男訳編　1983　ワロン／身体・自我・社会　ミネルヴァ書房.
浜田寿美男・山口俊郎　1984　子どもの生活世界のはじまり　ミネルヴァ書房.
浜田寿美男　1994　ピアジェとワロン　ミネルヴァ書房.
逸見武光　1975　今村新吉先生のこと　柴崎通信，第9号．精神医学神経学古書刊行会.
北海道大学教育学部創設40周年記念事業実行委員会編　1989　城戸幡太郎文庫目録　北海道大学教育学部創設40周年記念事業実行委員会.
堀要　1975　児童精神医学入門　金原書店.
堀尾輝久　1991　人間形成と教育　岩波書店.
堀尾輝久　1998　H.ワロンの仕事――その発達観・教育観を中心に――　教育学論集，第40号．109-135.
今村新吉　1975　今村新吉精神医学論文集　精神医学神経学古書刊行会.
Jalley, E. 1998 *Freud Wallon Lacan*: L'enfant au miroir. E.P.E.L.
Jalley, E. 2004 *La crise de la psychologie à l'université en France*. 1. Origine et déterminisme.: 2. État des lieux depuis 1990. L'Harmattan.
勝田守一　1952　日本の社会と子ども　教育創造，8月号．(勝田守一著作集4　人間形成と教育　国土社 38-56)
勝田守一　1958　教育の概念と教育学　(勝田守一編　教育学　青木書店　11-50)
勝田守一　1964　能力と発達と学習　国土社.
木村定　1960　新刊紹介　Wallon, H: Psychologie et éducation de l'Enfance. *Enfance*, No3-4. 1959.児童精神医学とその近接領域，第1巻2号．254 p.
城戸幡太郎　1932　現代心理学の主要問題　同文書院.
城戸幡太郎　1964　日本心理学史考：第2次世界大戦の終わるまで　東洋大学社会学部紀要，第4巻．1-20.　(城戸幡太郎　1981　教育心理学の反省と期待．教育出版．11-35．再録)
城戸幡太郎　1978　教育科学七十年　北大図書刊行会.
久野収　1972　問いかける群像(1)　毎日新聞，1月1日.
Lagache, D. 1993 *The work of DANIEL LAGACHE*: selected writings. Karnac Books.
Le Groupe française d'éducation nouvelle et la Société française de pédagogie 1947/1964 *Le Plan Langevin-Wallon de reform de L'enseignement*. P.U.F.
間宮正幸　1998　日本の臨床心理学の発展：戦前から戦後へ　心理科学研究会歴史部会（編）　日本心理学史の研究　法政出版．117-138.
間宮正幸　2000　教育臨床心理学研究の展望　教育臨床心理学研究紀要，創刊号．15-28.
間宮正幸　2001　臨床心理学の起点　文献選集　教育と保護の心理学　昭和戦後初期　別冊解題．クレス出版．66-75.
間宮正幸　2004　ワロンの発達・教育の思想と発達保障　障害者問題研究，第32巻，2号．79-84.
Mannoni, M. 1967 *L'enfant, sa "maladie" et les autres*. Édition du Seuil.（高木隆郎・荒井清共訳　1975　症状と言葉　ミネルヴァ書房）
宮城音弥　1977　人間の心を探求する　岩波書店.
村上英治　わが国における臨床心理学の発展　玉井収介・小嶋健四郎・片口安史（編）　臨床心理学講座，第4巻，誠信書房．9-28.
村上仁　1943　精神分裂病の心理　弘文堂書房.
村上仁　1952　異常心理学　岩波書店.
村上仁　1975　解題　今村新吉精神医学論文集　精神医学神経学古書刊行会.
村上仁・荻野恒一　1965　ジャネ　井村恒郎・懸田克躬・島崎敏樹・村上仁（編集）異常心理学講座　みすず書房　365-425.
村瀬孝雄　1985　日本の臨床心理学　内山喜久雄・河合隼雄・村瀬孝雄（編）　心理療法家と精神療法　金剛出版．57-74.
本明寛・今井もと子　1971　最近25年の臨床心理学の展望　心理学評論，第14巻，2号．282-294.

Nicolas, S. 2002 *Histoire de la psychologie française.*: Naissance d'une nouvelle science. In Press Éditions.
野上俊夫先生記念録編纂世話人会編　1965　野上俊夫先生記念録　京都大学文学部心理学研究室.
大場淳　2000　フランスの学校教育における心理職による児童生徒への支援活動　臨床心理士報, 第 11 巻第 2 号. 1-12.
大泉溥　1979　日本の教育心理学　心理科学研究会（編）教育心理学試論　三和書房. 11-60.
大泉溥　2003　日本心理学者事典　クレス出版.
小樽高商史研究会編　2002　自由主義経済学者の苦悩 —— 手塚寿郎の数理経済学 ——：小樽高商の人々　北海道大学図書刊行会.
Reuchlin, M 1957 *Histoire de la psychologie*. Collection QUE SAIS-JE? No 732（豊田三郎訳　1959　心理学の歴史　白水社）
坂田太郎他編　1966　フランス社会思想文献目録：小樽商科大学所蔵手塚文庫目録　春秋社.
坂元昂　1971　各国における研究の状況：フランス　末永俊郎編　講座心理学　第 1 巻, 歴史と動向　東京大学出版会. 226-246.
坂元忠芳　1988　ワロン『子どもの性格の諸起源』を読む —— 研究ノート ——(1)　東京都立大学人文学部報, 201 号(1). 1-50.
坂元忠芳　2000　情動と感情の教育学　大月書店.
Schachter, M.（牧原寛之訳　1976）自閉症および自閉的行動を示す児童 —— Kanner の早期幼児自閉症をめぐる, 臨床的寄与とその批判的考察 —— 児童精神医学とその近接領域, 第 17 巻, 第 4 号. 200-223.
清水寛　1981　発達保障思想の形成 —— 障害児教育の史的探求　青木書店.
関根義夫・松本雅彦　1997　村上仁先生を訪ねて　臨床精神病理, 第 18 巻, 3 号. 269-291.
下山晴彦　2001　日本の臨床心理学の歴史と展開　下山晴彦・丹野義彦（編）　講座臨床心理学 1　東京大学出版会. 51-72.
鈴木清　1962　臨床心理学の動向　応用心理学研究, 第 1 集, 113-119.
鈴木秀一・廣川和市　1984　城戸幡太郎先生著作・論文目録 —— 城戸幡太郎先生卒寿記念 ——　北海道大学教育学部紀要, 第 44 号. 91-109.
高木隆郎　2003　児童青年精神医学の展開　京都大学精神医学教室編　精神医学京都学派の 100 年　ナカニシヤ出版. 34-41.
高橋智　1998　城戸幡太郎学派の「精神薄弱」心理学研究：「知能」から「生活能力」へのパースペクティヴ　心理科学研究会歴史部会（編）　日本心理学史の研究　法政出版. 195-216.
高橋智・清水寛　1998　城戸幡太郎と日本の障害者教育科学 —— 障害児教育における「近代化」と「現代化」の歴史的位相 ——　多賀出版.
田中孝彦　2003　生き方を問う子どもたち　岩波書店.
田中昌人　1980 a　発達における可逆操作について　京都大学教育学部紀要, 26 号. 1-14.
田中昌人　1980 b　人間発達の科学　青木書店.
田中昌人　1997　全障研の結成と私の発達保障論. 全国障害者問題研究会編　全障研 30 年史　全国障害者問題研究会出版部. 439-575.
田中昌人　2003　発達保障論の諸相と課題　障害者問題研究, 第 32 巻, 第 2 号. 90-108.
戸川行男　1978　臨床心理学の歩みと課題　さいころじすと, 第 5 号. 1-3.
内島貞雄　1996　書評：高橋・清水著　城戸幡太郎と日本の障害者教育科学　教育学研究, 第 66 巻, 第 2 号. 201-202.
Wallon, H. 1946 le rôle de l'autre dans la conscience du moi. *Journal Égyptien Psychol*. 2, 1.; rééd. In *Enfance*, 1959, 3-4. 279-286.
Wallon, H. 1932 Culture générale et orientation professionnelle. *Pour l'Ère Nouvelle*,. 81. 245-252.
Wallon, H. 1938 *Encyclopédie Française*, t. VIII, publie sour la direction de Henri Wallon; *La vie mentale*, Paris, Soc. de Gestion de l'Encycl. Fr., Larousse dépositaire.
Wallon, H. 1941 *L'évolution psychologique de l'enfant*. A. Colin.
Wallon, H. 1945 *Les origines de la pensée chez l'enfant*. P.U.F.